

「ハンス・カロツサ」覚書

——作品化された医師たちをめぐって(三)——

村 山 正 雄

十三歳にして、すでにタバコのヤニのために指が黄色く染まっている少年。自己の純粹性を守るためとして、成熟しゆくことを恐れ、社会との接触をさけるあまり部屋にとじこもるエキセントリックな女性彫刻家。戦場での恐怖から精神に変調をきたし、戦後社会に同化しえないまま市中を彷徨しつづける復員兵。モルヒネ中毒の元女性歌手と、彼女のなすがままの夫。胸を患いつつも通行人に誘いをかける娼婦。そして戦没者の遺家族の群れ。

このように、きわめて粗雑に、簡単に拾いあげてみるだけでも、いわゆるワイマール共和国の一つの姿が浮かびあがってくる。医師ギオンが出会い、あるいはその傍らを通りすぎる人びとの多くは、肉体的であれ精神的であれ、何らかの意味で傷を負い、病んでいる。そのみか、市民生活そのものが窮乏し、飢餓に悩まされた大戦末期以来、ドイツ史激動の時期というにふさわしく、この大都会ミュンヘンに暮らす人びとも例外なく、多くの事件の目撃者となってきたのであった。

休戦協定の成立、そしてキール軍港における水兵蜂起に端を発したドイツ革命運動の波はやがて南のバイエルンに

も押し寄せる。ヴィッテルスバッハ王家の没落、社会民主党、独立社会民主党の抬頭、そしてバイエルン共和国さらにはバイエルン・レーテ（労農評議会）共和国の樹立とそのあわただしい坐折、その間の白色テロル、中央政府軍とバイエルン赤軍との市街戦。そうして、あの大インフレーションがきた。さらに、のちにドイツはおろかヨーロッパ全土を脅威にさらすことになるアドルフ・ヒトラーが暴動騒ぎを指揮するのは、この大インフレを切り抜けるべく中央政府がレンテンマルクを発行するに至るようやく一週間まえである。加えて、「十九世紀の病・結核」をのりこえ、今や「二十世紀の病」と成り上がったインフルエンザが、栄養不足の疲れ果てたミュンヘン市民をも痛撃する。

ドイツ映画の興隆に象徴される「黄金の一九二〇年代」が、その内部にあるいは背後に足元に、脆弱なもの、混沌としたものをかかえていたことは、よく知られている。ベルリン中央政府の小党群立による転変も、その一つの証左であろう。第一次世界大戦が激動の時代の始まりならば、この時期は第二幕というところであろうか。

「戦後」とはいえ、第二次世界大戦下におけるような、戦略爆撃による都市破壊が行なわれることは、まだなかった。このため、ミュンヘンの都市そのものは、帝制、いや、市民の気分にしたがえば、あの芸術狂・ルードヴィヒ二世を生み出した王制時代以来の景観を、まさに健全のままに維持している。それだけに、そこに生きる人びとの間にみられる混沌とした情況との対照は、きわだって奇妙なものである。この時代の不安を、カロッサは次のようにギオン医師に代言させている。

……戦争は終わっている。革命の争いも。だのに国民はまだそれをこわがっている。ことに女の人たちです。どんな口実だって、女の人たちは、見すかしてしまっているのですよ。それでもって人間同士、おたがいにまったくひどいことをしあうのだった。女の人たちはもはや、男どもの争いに英雄的な意味があるなどと信じてはいませんし、未来といっても殺戮と崩壊しか予期していません。ああ、シスター？ 女の魂には霜が降りているのです。新たに身

ごもることを身ぶるいして恐れるのですよ。かつては祝福されると呼ばれた状態になったのがわかると、多くの女性は今や我が身を呪って、胎内に芽生えつつある人類を押し殺してしまおうとする……。 (S. W. I, 199-200)

成熟を忌避していたあの女性彫刻家といい、生きることへの意志を、ひいては生きる能力、生命力をすでに失ないはじめているのだ。医師ギオンはそのように観察している。

大戦末期、ドイツ軍は最後の総力を結集しつつ、連合軍に対して乾坤一擲の戦いを挑んだ。いわゆる「ルーデンドルフの大攻勢」である。このとき、カロツサは北フランスの乱戦に近い戦場のなかで、ルーマニア以来の同僚の多くを失ない、彼自身も頻死の重傷を負うに至っている。病院や保養所を転々としたのち、ようやくに復員しえた彼が接したのは、一見すれば無傷の都市ミュンヘンであり、その内部の混乱に生きる人びとであった。

医師ギオンが小説の中で巡り歩くミュンヘンの町は、大インフレも収束し、外国からの輸入果物が市場に出回り、名物の歳の市も復活し、一見、平穏をとりもどしたかに見える。しかし、仔細に眺めれば、まがいもので飾りたてられた見かけだおしがそこかしこにある。たとえば歳の市である。

……明かるい色とりどりの屋台の街には、きわめて高齢の人びとさえ見かけられた。彼等がそこでもう一度見たいと願ったもの、それは過去の輝きであった。そしてある人びとはすべてを昔どおりに見ようと大そう努力した。しかし、まったく昔どおりというわけにはゆかなかった。ビールは気の抜けた味わいだし、あてものでせしめたものも、家へ持って帰る値打ちのないしろものだった。新しい時代を嘆きながら、多くの人びとはとぼとぼと家路につき、遺言の文句に思いをさせていた。 (S. W. I, 260-261)

幻滅の中で、人びとは過去の栄光の時代をなつかしみつつ、しかも、かろうじてまがいものにすぎることによって暮らしている。そして、こうした人びとの姿の極限に、冒頭にふれた「モルヒネ中毒の女」とその夫とがいる。

この女性と夫である大法院参事官とは、おそらく王制時代の名残りを最も色濃く保存している地区の、中世風の中庭を含みこんだ住居に暮らしている。玄関に飾られている猛禽類の剝製や蛮族などと呼ばれていた諸民族の武器の数々。様々の様式の家具調度。黄金の縞目のついた真紅のカーテン。その女性の豪華な衣装。何もかも昔どおりのように思える。微量のモルヒネを注射されて、女性はようやく禁断症状を脱する。元歌手のこのモルヒネ中毒者はつぶれてしまった自分の声を治すためにはモルヒネが必要不可欠であると信じて疑がわれない。それどころか参事官の夫も妻の思い込みに同調しているらしく思える。彼は、注射をしてくれた恩人であるギオン医師のために、歌のプレゼントをするよう提案し、自からは伴奏をするべく楽譜をとり出し、ピアノの蓋を開くのである。

……このアルトの声がかつて美しい響きをもっていたのかどうか、判別しかねた。今、その声には、重い重量がのしかかっているような響きがしていた。なおひどいことには、この歌い手の女性は、自然さというものをすべてしりぞけ、マリオネットまがいの様子を見せてくれるだけなのだ。それも無器用に操られた。

……（ギオンは）……指をいらつかせて、自分が座っている傍らの、あの黄金の縞目のある真紅のカーテンをなぞった。すると、その豪華な切地が、実は縮緬紙でできているのだということに気がついた。すると、今や一切すべてのことがまったく亡霊めいてくるように思われるのであった。（S. W. I, 348-349）

まがいものの生活。この夫婦は、モルヒネによる陶醉のなかで時代から眼をそむけ、過去の栄光に浸ろうとする。もとより、この現在においては幻覚幻聴にすぎず、彼らは虚妄の中に自己のアイデンティティを求めているのだ。モ

ルヒネの発見が一八一六年であることを医師ギオンから教えられたこの大法院参事官は、「この物質がわれわれの時代の初めにようやく発見されたということは、それまで人類がそれを必要としなかったという意味」(S. W. I, 344-345)であると解釈してみせる。この官吏は、みずからまがいのもの的人生を生きっていると告白しているわけである。苦痛に耐え、立ち向かう力としての生命力の涸渇している事実が、このことばに具現されているように。

カロッサの他の小説と同様、この『医師ギオン』にも、いわゆる小説らしいストーリー性は欠けている。現在、日本語訳では入手することが困難なこの物語の内容を大雑把に述べれば次のようになる。

近郊の山村の農家の下働きをするエメレンツという名の娘が妊娠し、ギオン医師のもとを訪れる。胎児の父親となるべき若い農夫はすでにインフルエンザで死亡している。そして妊婦自身が白血病を病んでおり、出産そのものが死に直結すると判断されていた。彼女をめぐる人々は、あるものはこの娘の置かれた状況のゆえから、またあるものは世界の前途への絶望から、中絶するよう勧める。しかし、この娘は秘かに出産を決意している。それを察したギオン医師は、同僚はじめ自己の周囲の人びとの助力を得て、エメレンツの出産を成功させるが、母親はやがてこの世を去る。そしてこのこされた嬰兒は、この分娩に協力した人びとの善意のなかで育ってゆく。

「意気を阻喪した幾千の人びとの中にあつて、ふたたび人間種属を發育させることに意を向けた最初の女」(S. W. I, 209) であると、ギオンは語る。ひとまずこの小説を、自己の死に代えても新らしい生命をこの世に出そうとした女と、彼女に協力した人びとの物語であると概括することができる。

混迷あるいは混沌とした時代とは、また再生、回復へと向かう暗中模索の時代の言いかえでもあろう。ワイマール共和国政府を左右の立場から揺さぶりつづけた共産党やナチ党の主張とは勿論その態様を異にするとはいえ、かつかにささやかであるにせよ、この『医師ギオン』もまた、カロッサなりの「生活・人生・生命」の回復への試みとして位置づけられてもよいのである。この試みへの考察を、以下、ギオンの医師としての仕事のありようを注目するこ

とによって深めてゆくこととする。

二

カロツサが彼の作品に主人公として登場させる医者たちは、たしかに、トーマス・マンが『魔の山』のなかにいささか戯画化してみせた医者とは趣きが異なる。とくに病者との関係である。

『魔の山』の医者は、支配者然と振舞う。主人公ハンス・カストルプが患者となりゆくさまをみれば、それは十分に推察しうるのである。この若者は、はじめは見舞者として結核サナトリウムを訪れる。患者である友人から医者を紹介され、みずから健康人だと名乗るが逆にこの医師から皮肉られる。

しかし、それじゃあ、あなたはきわめて研究に値する現象ですね！ つまり、まったく健康な人間なんて、私はまだ出会ったことがないのですよ。… (Th. Mann, G. W. III, 29-30)

そしてその翌日、サナトリウムの院長から貧血であると指摘されると、それ以後は、「そうだ、健康さ、貧血を除けばね」などと友人に語りはじめる。そうして、結局は肺結核を患うに至るのである。

医学に対するこの時代の人びとの崇拜と、その結果としての医学・医師による支配がここにみられる。医師から健康にあらずとの宣告を受ければ、そのときから当人は健康ではないのだ。人間の生命や生活、はては人生にいたるまでを管理しうる権威が、近代医学の体現者たる医師たちに付与されているのだ。サナトリウムの余興として催される音楽会に対して、一人の患者が「薬局の匂いがして、上の方から衛生的理由からとかいって割り当てられるような音

樂など、聞きたくもありませんね」(G. W. III, 159) と断言する場面は、このあたりの事情を物語ってしよう。そして、世俗の国家に伍しての独立を誇示するかのようになり、療養ホールの横に、一旒の旗が翻っている。

……緑と白の、おとぎの国のもののような旗で、その真ん中には、医学の象徴であるヘビのからまった杖が染め抜かれていた。(G. W. III, 58)

たしかにこのサナトリウムは、医学によって組織化され、制度化された世界なのである。近代諸国家が自己肥大を意図して植民地獲得競争に邁進したのと同様、ここでは医学は病気を治すのではなく、医学自身の足場を強固にせんがために、病気を見つけ、あえていえば、病気を作り出しているかのようである。ハンス・カストルプの例にも、そのことが読みとりうる。医学という学問や医師という専門家のために患者は存在するという倒錯した状況がここに見出だされよう。

一方、カロツサの小説に登場する医師たちは、すべて市井の開業医であり、T・マンの『魔の山』のように組織化された病院やサナトリウムに勤務しているわけではない。しかしながら、共に同時代を同業者として生きるゆえに、両者は無縁ではありえない。通常の生活者の間に立ち混じって働く開業医にも、相応の傾向が見られるのは、当然なのである。たとえば、ギオン医師がひそかに「医魔」(ein ärztlicher Dämon) と命名する婦人科医がそれである。ギオンによれば、「彼ほどに誠実で、明析で、根気のよい研究者 (Arbeiter) はいない」(S. W. I, 321) のだという。情熱的に活動するこの婦人科医は、自己の周囲に崇拜者となった婦人たちを引きよせ、その活動に奉仕させる。ギオンに協力してエメンツの出産を成功させたのち、もはや彼女に授乳の可能性がないと看とると、彼・アモン医師は、崇拜者たちのなかから、嬰兒を失なったばかりの若い母親を、ただちに選びだしてくるのである。

この婦人は、エメレンツの幼な子のために新考案の乳児用寝台を贈り、その効用を熱心に説明する。

……しばらく前から、アモン博士が論文や講演のなかでそれを断固として支持していたことが、今、ギオンに思
いあたった。……この女性が新考案の長所を説いたり賞めそやしたりしはじめると、その口調に至るまで、彼の
親しい同僚が語るのを聞いているように思えた。(S. W. I, 382)

サナトリウムとはまた異なった、目に見えない形式ではあっても、医師によって、あるいは医学にしたがって秩序
化された人々もまた存在しているのだ。ギオンの場合、このような医師と他の人々との関係を全面的に否定してはい
ない。しかしそのような関係が、医師自身をも含めて、一人の人間の自立した生を損いうるとの予感を、ギオンはも
っている。

一人の老医師の錯乱にその一端をうかがうことができる。この老医師は、医師として高い評価をうけている一方、
医師会のいずれの集会においても、報告者が誰であろうと野次り倒し、しかも自からも頻々と発言を求めては奇矯な
不満を述べたてる癖のある困り者でもあった。その彼が、戦没者記念像の前で戦死した息子に呼びかけるうち、自己
の窮状を訴えはじめる。

この老医師のもとに、しきりに電話がかけられてくる。昼間は言うに及ばず、休憩時も夜間の就寝時にも発信音が
老医師を呼びたてる。しかも受話器を手にとると、

……二秒間ほど何の音もしない。突然、器械はバカ笑いで震えるのだ。つなぎまちがいました！ と世界のどこ
からか叫ぶのだ——つなぎまちがいました！ それからカチリと音がして静かになり、もうそれっきりだ……

この老医師は、自己の没落を期待する者の所業であると信じ、煩悶するのである。この「つなぎまちがいました！ (falsch verbunden)」は同時に「包帯をし損じた！」の意も兼ねている。さればこそ老医師は訴えるのである。いつかギプスの包帯をわずかにやり損じたことはあるだろう。いかに外科の名手でもたまには失敗するではないか、だからといってどうして永遠に怒鳴りつづけられなくてはならないのか、と。

電話という器械は不特定のしかも匿名の相手との対話を医師に強いる。発信者にはいとも手軽なこの器械は、この老医師を翻弄し、錯乱へと導く。思いあまって受話器を取り除けておいた際、医師を呼ぶことができないまま死亡した病人への痛恨の思いもそこに加わる。自己の職務への使命感、技術への研鑽、失敗への自責。そこにおいてこの“falsch verbunden!”は患者から頼られる医師の激務と、しかも失敗への嘲けりとの両様の意味をもつ。そのはざまに、この老医師は疲労し尽くさざるをえないのである。この直後、老医師は路上に頓死する。

ギオン医師の場合、いわば医学の呪縛のもとに錯乱することもなければ、逆に医学の権威によって信服者を呪縛することもない。むしろ医学や医術に距離を置く態度さえ見うけられる。

ある夜、ギオンは、鼻孔の奥深くまでガラス玉を押しこんでしまいそのために頭痛を訴える少年のもとへ呼び出される。球がすでに脳の中に入ってしまったと悲嘆にくれる母親に向かって、居合わせた若い看護婦は医学の進歩を強調し、頭蓋骨の切開手術によって抉り出せるのだと説明している。それに対して、ギオンは指先で滑稽な仕草を演じてみせ、子供を笑わせて、そのガラス玉を吹き出させてしまう。一同が大喜びするのは言うまでもない。しかし、

……灰色帽の看護婦だけはこの無血の処置を妥当とは認められないらしかった。軽く肩をすくめることで、彼

女は、レントゲン撮影や頭蓋骨切開をしないで行なわれる治療をどれほど問題にしていなかをはっきりと示した。(S. W. I, 246)

看護婦ならずとも、このギオンの処置が治療と呼びうるものか、判断に苦しむであろう。ただし、ギオンは治療費を拒んではいない。病者の置かれた状況を度外視し、ひたすらに問題解決のみを求めざるをえなかった近代医学に対する一つのユーモアとも解しうる。病患部ではなく、病者の生こそが問題なのであった。そのことは、ギオンの以下の発言にも顕著である。

……飢餓がドイツに広まったとき、たくさんの方がおのずと消えたのだ。それで臨床の教師たちは学生たちに関節炎だの肝臓萎縮だのを見せようとして、途方に暮れたわけだ。これらのものは死滅してしまった動物種と同じで、伝説的になってしまったのだね。そのように、ある種の精神肥大だって適切に自制すれば消えてゆくか
あ…… (S. W. I, 258)

病気を追究することによってのみ権威性を誇示してきた近代医学へのユーモアが、ここにも語られる。医学の結果ではなく、ほかならぬ災厄によって駆逐された病気がある。それを指摘することによって、ギオンは人間の暮しぶり、ここでは自制した生活様式を強調しようとしていた。ただし、ギオンはここで近代医学を痛罵しようとしたわけではない。何よりも彼自身が近代医学の徒なのだ。じじつ、あのエメレンツを初めて診察したその日、その容態の危機を認識した彼は、病院勤務の同僚に処置を委ねるべく、依頼状の文言までを考えているのである。しかし、彼はその企てを翻す。

……いったい、ある治療方法を推してみたり、わずか二、三年の寿命を引き延ばしたりすることは、ほんとうに大事だろうか？いや、魂というものは自分の時刻に向かって尽力しようとするのだ。おまえはそれがわかっている…… (S. W. I, 220)

病者自身の生の必要に応じることこそが医術なのである。そのことをギオンはすでに了解している。この場合、エメレンツが新らしい生命を誕生させようとする決意に助力することであろう。そしてそれは、単に分娩を成功させるというのみにとどまらない。生命・生活・人生を一つの全体として理解するかぎり、その人間が生まれ、育ち、生活する場の形成も考えざるをえないのである。つまり、母親のエメレンツの死が、すでに予想されているからである。以下、ギオンの試みを考察しつづける。

三

『医師ギオン』の終章。エメレンツが育ち、やがてその遺児ヨハンナの生育する農家の人びとと、エメレンツが息を引きとり、そしてヨハンナの誕生した都市に暮らすギオンたちとの間に交流が生まれている。山村、都市それぞれがお互いに必要なものを分かちあい、精神的にも物質的にもささえあっている。そして「山間部と都市とはやがて一つの故郷 (Heimat) となるのである。」 (S. W. I, 388) と語られる。

その一方で、ヨハンナの生まれた翌朝、ギオンは女性彫刻家ツェンティアのアトリエの窓から、下にぎわめく人びとの群れを見やりながら、思わずつぶやくのである。

雑踏している蜂のような群衆、どれほど遠くさまよっているのやら。(S. W. I, 380)

「故郷」とは別に、この大都会に行き交う人々を、彼は「さまよっている (herverirren)」のだと観察している。本来の自己が生きる場からへだてられ、いわば根無し草として生きざるをえない人びとだというのである。

この言葉は、単なる嘆息や、ギオン自身の生きざまの誇示から発したものではない。この「故郷」と「迷う」という二つの言葉は、カロッサにとっては、「光」と「闇」という一對のことばを人間が生きる場にそくした言い換えなのである。つまり、彼の作品の本質にかかわる。したがって、『医師ギオン』のみならず、これまでに触れてきた『ドクトル・ビュルガーの運命』そして『ルーマニア日記』においても、この二つの言葉は、いわば通奏低音のように、医師たちの試みる生への洞察のなかに流れているのである。換言すれば、三つの作品をつなぐ鍵、まさしくキー・ワードであるとしてさしつかえあるまい。

たとえば、医師ビュルガーは、のちに愛人となるハンナ・コルネットを初診した翌日、次のように記している。

彼女の小さな部屋——この中にある一切のものは、ここに故郷を感じず、永住を考えていない一人の女性のことを、何と悲しく物語っていることだろう…… (S. W. I, 151)

ハンナの部屋のわびしい調度品から、彼女がここに根付いて生きる人間ではないことを、医師は早くも観てとる。往診が重なり、親しみが増すにつれ、彼女はビュルガーにおのれの過去を告白する。そのとき、ビュルガーはあらためて彼女の人生の寄るべのなさを思うのである。

『ギオン』におけるエメレンツと同様、このハンナも、すでに許婚者を亡くした未婚の母であった。そしてその子

供を他家に託して働らかざるをえない境遇にある。

……こうして、彼女は新らしい職を求めるに際しては給料の額の多さ以外には何も考えず、そうやってわれわれの町にやって来たのだ。

これが彼女の運命か——神よ、異郷にさまよわねばならぬ幾千の娘たちの運命なのだ…… (S. W. I, 154)

この作品の舞台であるパッサウの町は、旧くはあるが大都市ではない。しかし、ここにもすでに百貨店は開かれ、ハンナもその婦人帽製造の下請けとして職を得ている。近代化という流れにおける都市化現象、消費地としての都市のさらなる肥大化。それをささえるのは、つまり他郷人の流入なのである。このことは同時に、生きる場を喪失した、あるいは奪われた人びとの発生をも意味する。都市は、生きる場としての必然性を共有しえない人びとが行き交う空間でしかなくなるのである。そこでは、たとえば伝統的な農村や山村のように、人間の生、死のサイクルが土地を媒介としてくり返されるという自覚はない。未来の子孫を信頼しつつ死にゆく場を確保しえない人びとにとっての世界、それが異郷なのである。

「近代」のもたらした病である結核の脅威、近代化によって断ち切られた伝統的な暮しとそのエートス、病を病者から捨象する近代医学。これらの総和の一つの帰結として、医師ビュルガーの混乱が生じたといえるであろう。

そのように故郷からの流浪、異郷における死を人間に強いてゆくことが近代化の一つの側面であるとすれば、それを大規模かつ組織的に展開してみせたのは、軍隊であろう。多くの近代国家がその兵制において、旧来の貴族階級主体の従士団や庸兵という、いわば職業軍隊に代わって、一般兵役義務制つまり徴兵制を採用した事実はきわめて象徴的でさえある。近代国家は、祖国という擬制故郷の名のもとに、その国民を異郷へと送り出す。余談ながら、日本語

にいう「根こそぎ動員」は、土地とそこに根ざした生き物とのかかわりをたとえていうことによつて、この間の事情を、われしらず暗示しているようである。

いかように讃えられようとも、軍隊、とりわけ外征軍が、風土に根ざして生きる常民と対比してみれば、故郷喪失者の群れにすぎないこと、明々白々である。『ルーマニア日記』の記者である大隊軍医は、戦火をさけて避難するマジャール人農民と行き会ったある日、そうした自覚をのこしている。

……これらの人びとの姿は、すぐさま私の心のなかで彫像のようになった。とくに母親であるらしい統率者だ。それで、ただ一度きりわれわれの傍らを、どうでもよい出会いに染まらずに通り過ぎてゆく異国の人びとには何か神聖なものがある。このようにグラヴィーナは書いていたけれど、彼の言ったことがわかった。その態度は誇らからで……われわれの方を眼中にも置かず、まっすぐ前方を見つめていたが、それはまるで後女こそが真の完全な生であり、われわれは墮落して、さまよっているかのようにであった。(S. W. I, 468)

太古の野生を生きた時代より受け継がれてきた生命の流れを、大隊軍医はこの異民族の人びとから自覚させられる。この生のありようから、兵士は疎外されている。兵士の死ぬべき場所は異郷なのだ。『ルーマニア日記』は、兵士グラヴィーナの遺稿詩を、このような兵士たちのための挽歌として朗唱しつつ、そのフィナーレとしている。

キシユハヴァシユの山の辺に塚を築かしめよ、霜の降りし岩——杜松の野辺にて殺されし者たちの記念碑を、
掟に忠実に、不平もあげず、目にとめられず、櫛の樹も緑なさぬ異郷の岩の上に、彼らは血を流して果てる。

(S. W. I, 498)

……われわれは木の葉のごとく異郷の野に舞い落ちる——われわれの死より湧き出ずるものは何か？ (S. W. I, 500)

戦野に散らされた墨々たる死体。この者たちの生を育くみつづけた故郷から隔てられ、必然性のない、画一的な死を強要された無念の感情がここから読みとれよう。詩人はこの死者たちと共に臥しつつも、同時にこの死者たちを凝視し、彼らの新らしい再生を念じ、その息吹きを予感する。そして、帰郷する者に、故郷に生きるにのぞんでの決意を促すのである。

しかし帰郷する者は備えをせよ！ 一人ひとりを別の声で神は呼ぶのだ。まっすぐの変転は君らのものだ。長い仕事日、祝祭は稀れ、くつろぎの歌も稀れ。カモシカの眠るように、目覚めつつまどろみたまえ！ (S. W. I, 499)

そして、死者たちからの呼びかけを受けとり、生の奉仕への新らしい基礎とするのは、帰郷した軍医であり、つまり、医師ギオンなのである。

さて、いまだ戦時勤務の名残りを口調や習慣にとどめる医師ギオンには、異郷に倒れた人びとの望郷の想いにひきくらべ、この大都市ミュンヘンに生きる人びとの多くは故郷を失なったままあてもなく彷徨しているかのようである。たとえば、例のモルヒネ中毒の元歌手は、禁断症状を脱して落ち着きをとりもどすと、田舎町に暮らした少女時

代を懐かしみつつ、その思い出を語りはじめる。それとは逆に、かつてギオンの診察をうけていた娼婦は、彼から農村での少女時代を想起させられることを拒絶する。いずれにせよ、故郷を捨て去るとは、その人間の本来の暮らしの流儀を脱すること、ひいては固有の生そのものを見失なうことへとつうじているのだ。

かろうじて伝統的な生のエートスを維持すべくつとめたとしても、都市に生きる場としての必然性を感じえないのであれば、その落差は痛ましいとさえ思える。タバコのヤニで指先を黄色く染めた少年トーニーの祖母が死にゆく情景は、その落差を如実に物語っている。

孫と二人、持病に悩みつつも、ようやく暮らしていた彼女は、つね日頃、孫に死に際しての作法を伝授していた。そしてある日、すでに臨終の近いことを悟った彼女は、みずから死装束を身にまとい、床に臥したまま、壁面の聖母像に微笑を投げかけている。その様子を見つけた少年は、教えられていたとおり、葬りのろうそくに点火し、古い紙片に示されていた祈禱文を誦し、死者の眼陰を閉じさせ、胸上に手を組み合わせ、髪をすきあげ、顔をぬぐい、口を閉じさせ、帽子をかぶらせる。伝統的な流儀にしたがった。まことに風格ある臨終とさえ言いうるであろう。しかし、彼女を見送るのは孫一人のみであり、死にゆく者を囲む共同体はここには存していない。まして残される人びととその土地の未来への確信も欠けている。

そのろうを滴らされた紙片は、農民であった先祖から遠く伝えられたのであったが、色あせた筆跡で短かい祈禱が書き入れてあった。それはたしかに多くの死にゆく者の伴侶となっていた…… (S. W. I, 277)

……年来、この目的のために黒い織物が長目の箱に用意されていた。それはある巡礼の折に聖別を受けたことさえあり、貴重なもの、永遠なるもの、かけがえのないものの化身なのであった。しかし……それに触れただけで

も、彼の手の下で毛のように、弱々しく光る粉にまで砕けてしまった。信心深く保存されていた家宝がこのように不意に消えゆくことは、何か不気味であった…… (S. W. I, 278)

死の尊厳を維持しているこの祖母も例外なく、さまざま都市民の一人なのであった。生きる根を断たれ、生育した場から移された植物が枯れ、やがて朽ちるように、彼女は死にゆく。古びたものの死ではありえたとしても、生への奉仕のための前提がここにはない。

したがって、エメレンツの死・出産に備えて、ギオン医師がさまざまの配慮を心がけるのも、いわば当然なのである。エメレンツもまた農民であり、そこから都市に流入させられる故である。

彼女は新生児を傍らに寝かせつつ死ぬ。この死は、新しい生命へと連続させる接点に位置している。母子を取り巻き、心を配る一群の人びとの情景は、古い絵画を思い起こさせるほどに印象的である。それはまた、トーニーの祖母には欠けていた、死にゆくものを囲む生ける共同体なのであった。すでにエメレンツは、みずからの死にゆく場たる都市に根付きはじめていたわけである。

物語には、エメレンツが都市に馴染みゆく経過がそれとなく述べられている。

……アトリエには、彼女はほんとうにすぐに慣れていった。そしてここにすぐすくことを許された日々について、あるとき、彼女は、その短い生涯でもっともすばらしいと述べたことがあった。(S. W. I, 325)

医師はじめ、エメレンツの自己の生命にかえても出産しようとする決意に動かされた人びとの善意のなかで、彼女は女性彫刻家ツェンティアのアトリエへと迎え入れられる。ここが彼女の病室・分娩室そして終の住処となってゆく

のである。

高い窓に鳥や飛行船の飛びゆくのが見えた。商人たちは売り物を歌いあげ、市の鐘が響いてきた。このすべてのものは美しくはあったが、彼女には故郷という感じを与えるものではなかった。けれどもあの女性彫刻家が……時折、彼女にまなざしを送り、それがまじめな親しい微笑みに移りゆくと、……彼女にはわかったのだ。私はここに不可欠なのだ。私はここに属しているのだと。(S. W. I, 326)

そうして、この大都市の只中にあるアトリエに彼女は安んじて新生児を生み、後事を託しつつ、おのれの死を受け容れてゆく。新らしい生命に奉仕する「よき死」がここに象徴されていよう。この場における医師の仕事とは、生死を一つの全体として凝視することによって、それぞれの人びとが各自の本分を尽くしながら「生への奉仕」を遂げうるように配慮するということに集約される。この奉仕は医師一人がなしうるわざではないのだ。それゆえ、「単に以前の状態がまたもや現われるだけで、生命力がたつぷりと増さないような治療では、治療とは言えぬ」(S. W. I, 223)とギオン医師が自問自答するとき、彼の思惟は、近代医学への懷疑を越え、より高い生の調和する世界、芸術家の構想する古典的な宇宙像へと向けられていたというべきであろう。医師の思惟、詩人の想念がここに重なりあうのである。

四

医師と芸術家あるいは詩人——ギオン医師はこの関係について、ツェンティアに対して、次のように説き明かして

いる。

医師とは何なのか？ これをかつて考えてみたことがあるかい？ 最高の形になれば、それは、芸術家と同質 (ebenbürtig) であるかもしれないのだよ。けれど芸術家のように靈感の与えられる時刻 (Stunde) を待ったり、あるいは対象を選んだり許されないのだ。ではなくて、対象のほうに医者を選ぶのだし、何時でもその時刻 (Stunde) なのだ。初めから誰かを拒否することはできるだろうか？ だめだね…… (S. W. I, 322)

ここでいう「対象」つまり病者が医者を選ぶのだというが、ギオンは、エメレンツを、まさに自己の決意をもって引き受けたことは、物語から明瞭に読みとれるであろう。また、モルヒネ中毒の女性から家庭医となるよう期待されながら、彼はそれを理由が何であるにせよ、避けている。ここでも医者が対象を選んでいるのだ。そのとき、彼は芸術家として振舞っているように思える。いっかな治療らしい治療を施す姿を見せず、ひたすら凝視に努めることから推察すれば、この疑念はさらに深まるであろう。そしてこの凝視に関しても、ツェンティアの語るところをあわせて考察すれば、その意義は明白といふべきである。

エメレンツを都市へと引きとるべく出発するトニーを見送ったのち、戦没兵士記念像のスケッチをめぐって、ツェンティアはギオンに向かって次のように語りかける。

——わたしたちは静かにしていきましょう。目に見えるものの中へは入らないようにしましょう。わたしたち自身は、そう、つまらないものよ。ただ、やって来る未知のものを、私たちを神聖にしてくれる古いものと接続させることによってだけ、わたしたちは価値があるのよ。(S. W. I, 310)

このことばは、『医師ギオン』が、芸術家の物語でもあったことを暗示しているよう。作者カロッサが医師でありつづけることによつて詩人としての自己を成長させてきたように、彼の作品に登場する医師たちも、芸術家へと変転してゆかざるを得ない。この問題については、いづれ稿を改めて考察するべく、ここでは、一つの覚え書きにとどめたい。

トキエと及び参考文献

- Carossa, Hans : Sämtliche Werke (S.W.) Bd. I, II, Insel Verlag, Frankfurt a. M. 1962.
: Briefe Bd. I, II, III, Insel Verlag, 1978-1981.
- Mann, Thomas : Gesammelte Werke (G. W.) Bd. III, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1974.
- Langen, August : Hans Carossa. Weltbild und Stil, -2. Aufl.- E. Schmidt, Berlin, 1976.
- Vogt, Willi : Hans Carossa in unserer Zeit, Rotapfel-Verlag, Zürich, 1978.
- Falkenstein, Henning : Hans Carossa, Colloquium Verlag, Berlin, 1983.
- Rohner, Ludwig : Die Sprachkunst Hans Carossas. Der Stil als Spiegel des Weltbildes, Max Hueber Verlag, München, 1955.
- Haueis, Albert : Hans Carossa. Persönlichkeit und Werk, Hermann Böhlau Nachfolger, 1935.
- Martini, Fritz : Das Wagnis der Sprache, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1954.
- Braun, Felix : Rumänisches Tagebuch. In : Über Hans Carossa, hrsg. von Volker Michels, Suhrkamp Verlag, 1979.
- Faesi Robert : Hans Carossa als Arzt und Dichter. In : Über Hans Carossa.
- Hohoff, Kurt : Arzt und Dichter. In : Über Hans Carossa.
- Korrodi, Eduard : Der Arzt Gion. In : Über Hans Carossa.
- Krell, Max : Raube das Licht aus dem Rache der Schlange. In : Über Hans Carossa.
- Müller-Seidel, Walter : Autobiographie als Dichtung bei Hans Carossa. In : Über Hans Carossa.
- Ruprecht, Erich : Hans Carossas heilkundige Dichtung. In : Über Hans Carossa.

Illich, Ivan : Limits to Medicine. Medical Nemesis ; The Expropriation of Health, Calder & Boyers Ltd., London, 1976.

(金子嗣郎訳『脱病院化社会』 晶文社 一九七九年)

Ariès, Philippe : Essais sur L'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours, Éditions du Seuil, Paris, 1975.

(伊藤晃・成瀬駒男訳『死と歴史』 みすず書房 一九八三年)

Hart, Lidell : History of the first world war, Cassel & Co. Ltd., 1970.

(上村達雄訳『第一次世界大戦』 フジ出版社 一九七六年)

村上陽一郎(編) 『医学思想と人間』 朝倉書店 一九七九年

二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦(編) 『医と病い』 新評論 一九八四年

立川 昭二 『病気の社会史』 日本放送出版協会 一九七一年

大江志乃夫 『徴兵制』 岩波書店 一九八一年